

小学校教育

会報教育北海道別冊

小学校教育

二〇二二年一月 第五十八号

北海道小学校長会



58

北海道小学校長会

2022.1



表紙のことは

「透き通る絶景 鮮やかな支笏湖ブルー」

石狩市立花川南小学校 吉田篤弘

千歳市は、道内でも数少ない人口増加を続け、平均年齢が道内一若い活気のある中核都市です。また、日本最北の不凍湖である支笏湖、世界文化遺産に登録された「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産キウス周堤墓群をかかえる豊かな自然と太古の歴史を感じることできるまちでもあります。

写真の支笏湖は、標高1,000mを超える山々に囲まれ、水質のよさと透明度は有名で、湖面の美しい青色は「支笏湖ブルー」と呼ばれています。湖畔に立つと、緑と青のコントラストに心が洗われます。

この千歳市で2年ぶりの会同による研究大会の開催を予定していましたが、新型コロナウイルス感染症拡大状況から全体会はオンライン配信、分科会の研究発表は動画の限定公開及び誌上交流と工夫を凝らし、開催に至りました。ご理解ご支援いただいた全道の校長先生方、関係機関の皆様方に感謝申し上げます。

一堂に会することは今年度もできませんでしたが、未来社会の創造に挑戦する子どもたちを育む学校経

営への新たなステージに一步進み出すという大会の成果を発信することができました。

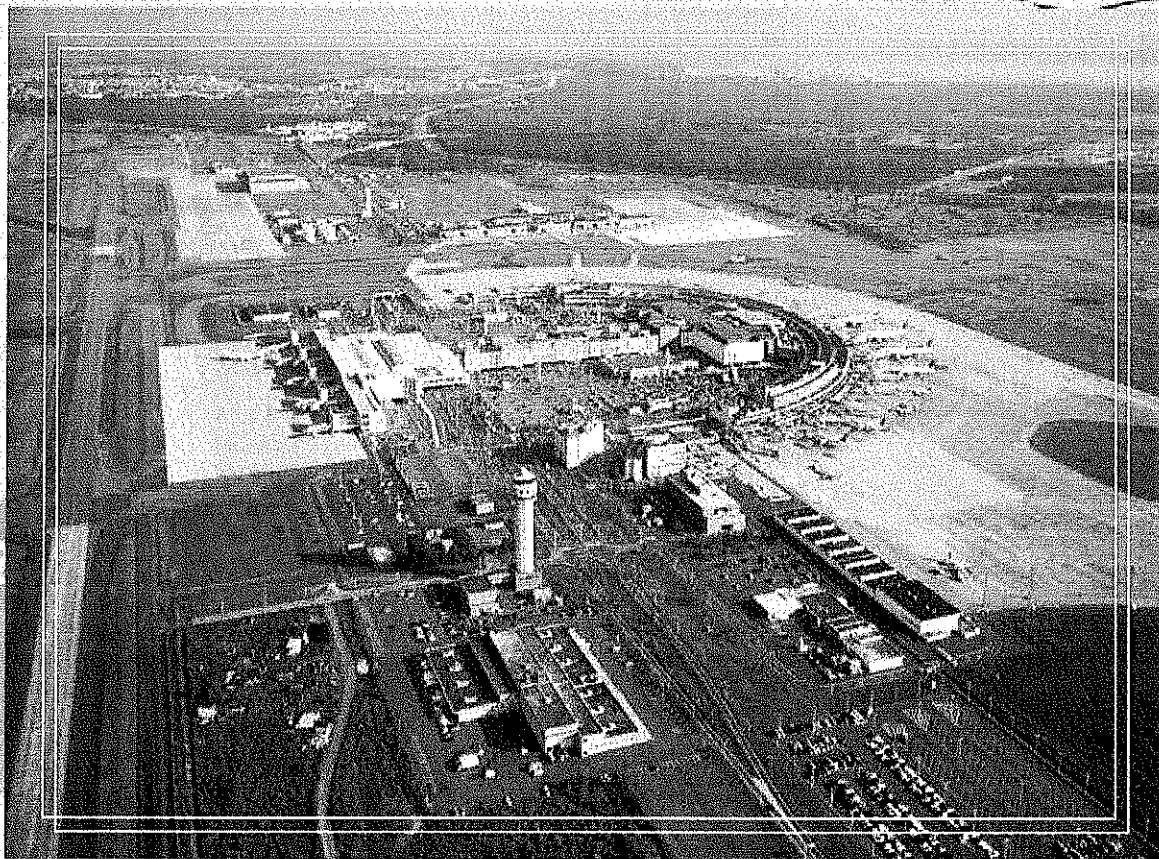
これからも一層予測困難な社会の状況が続きそうではありますが、各校長先生方が、透明度の高い支笏湖のように未来を見据えて、大会の成果を各学校での実践につなげていただければ幸いです。



自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進

～ふるさとに誇りと愛着をもち

ともに未来社会の創造に挑戦する子どもを育てる学校経営の推進～



新千歳空港



世界をつなぐ千歳から
未来を創る子どもたちの笑顔と希望を乗せ
新たなステージに歩み出そう！

第64回北海道小学校長会教育研究石狩・千歳大会

もくじ

大会特集

小学校教育

58

令和4年1月



大会会長挨拶	2
大会実行委員長挨拶	3
祝 辞	4
道教委講話	8
当面の諸課題	12
大会主題・研究課題 趣旨説明	21
記録写真	22
研究大会開催要項	24
分科会運営者一覧	25
第1分科会	26
第2分科会	30
第3分科会	34
第4分科会	38
第5分科会	42
第6分科会	46
第8分科会	50
第10分科会	54
第11分科会	58
第12分科会	62
第13分科会	66
研究のまとめ	70
記念講演	72
次期開催地挨拶	75
編集後記	76

大会会長挨拶

北海道小学校長会長

吉田 信 興



全道各地の皆様、おはようございます。

第64回北海道小学校長会教育研究石狩・千歳大会を476名の参加者を得て開催できますことを大変嬉しく思っております。参集型での大会とはなりませんでしたが、本日はオンラインを活用し、北海道内を結んで全体会を行います。全国連合小学校長会長 大字 弘一郎 様による当分の諸課題についてのご講話、北海道日本ハムファイターズ取締役事業統轄本部長 前沢 賢 様による記念講演。お二人から大いに学び、日々の学校経営に役立てたいと思います。例年ですと、北海道教育委員会からのご講話もございました。昨日行われた第3回理事研修会にて、中澤 美明 指導担当局長様よりご講話をしていただきました。その記録を研究大会の集録に収めさせていただくことになっております。

本日、全体会が終わりますと、誌上交流にて分科会を行います。昨年に引き続いての誌上交流です。ご感想、ご意見等をお寄せください。道小の研究大会では「分科会の充実こそ最大のおもてなし」を合言葉にその発展を目指し、ホームページの活用、グループ討議の工夫やアナライズカードの効果的な活用、討議内容の視覚化の工夫など、様々な取組を行ってまいりました。今回は動画で「趣旨説明」と「研究発表」を行います。大会要項をお読みいただき、配信する動画もご覧いただきながら、趣旨や発表の理解を深めていただくとともに地区の研究の特徴や発表者のお人なりも感じとっていただければ幸いです。

道小の研究は20地区の組織的な研究体制と数箇年周期の継続的・発展的な充実した研究内容によって支えられております。その発表の場が研究大会の分科会であり、毎年途切れることなく続いております。どの分科会の研究発表も理論と実践に裏付けられた素晴らしい内容です。ご自身の担当以外の分科会についても、大会要項をお読みいただき、様々な領域やテーマから研鑽を重ねていただければ幸いです。

現在、北海道は新型コロナウイルス感染症拡大による緊急事態宣言が発令中です。各学校ではこれまでと変わらぬ対策を講じ、安全・安心な環境づくりに努め、今、

できることは何かを全教職員で模索しながら、前を向いて教育活動を進めておられることと思います。学習指導要領は全面実施2年目を迎え、「主体的・対話的で深い学び」への授業改善の定着が必須であります。併せて、中教審より答申のあった「令和の日本型学校教育」に求められる児童生徒の学びのスタイルは「個別最適な学び」と「協働的な学び」であります。個の思いや願い、個性を大切にしたい個の学びと、これまで以上に個に丁寧な評価・指導を行う教師の関わりによって、個の学びは充実します。そして、多様な考えをもつ仲間と協働的に学ぶことで、個の学びは最適なものになります。GIGAスクール構想の前倒しで急遽整備された一人一台端末を積極的に活用することでますます個の学びは最適なものになる可能性が高まります。コロナの状況は厳しいですが、一人一人の子どもの資質・能力を確かに育てること、そして中学校に送ることが、小学校に求められている大きな課題であると思います。この他にも学校における働き方改革や教員の質の向上といった教職員に関する課題、学力・体力向上、いじめや不登校等子どもに関する課題、ICTやスクールサポートスタッフ等の教育環境や人的環境の課題、教育課程の編成や危機管理などの学校経営上の課題など、私たち校長には常に心しておく課題があります。

この後のご講話、記念講演、そして分科会での研究発表が課題解決に向けての糸口になればと期待しております。

結びになりましたが、開催をお支えいただきました北海道教育委員会、千歳市、千歳市教育委員会、石狩管内教育委員会協議会、全国連合小学校長会、公益社団法人日本教育会の皆様に心より感謝申し上げます。

また大会を主管され管内校長会の総力でご準備をいただきました、鹿野 秀一 会長をはじめとした石狩管内小学校長会の皆様、小松 義幸 大会実行委員長、今村 敏之 大会実行委員会事務局長を中心に綿密な計画と準備をしていただいた大会実行委員の皆様、各分科会を支えていただいた皆様に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

この後、全体会、誌上交流分科会と続きます。どうぞ皆様、よろしく願いいたします。

大会実行委員長挨拶

石狩・千歳大会実行委員長

小 松 義 幸



全道の各地区校長会の皆様、おはようございます。石狩・千歳大会実行委員会を代表して一言ご挨拶申し上げます。

昨年度から続く新型コロナウイルス感染症の拡大により、残念ながら、全道各地区校長会の皆様に千歳市にお迎えすることができなくなりましたが、当面の諸課題や記念講演等のオンライン配信、研究発表の動画公開等、開催方法を工夫し、研究・交流が深まるよう、実行委員会が一丸となって準備を進めてまいりました。

さて、昨年度から改訂された学習指導要領が全面实施となり、社会の急激な変化にしなやかに対応し、予測困難な時代をたくましく生き抜いていく力の育成が学校現場に求められています。まさに、昨今の新型コロナウイルスとの闘いは、答えのない課題にどう立ち向かっていくかが問われており、すでに予測困難な時代を迎えていると言えます。また、Society5.0の到来やグローバル化の進展、少子高齢化や地球温暖化等の課題も山積しております。これらの変化や課題を自分自身の問題としてとらえ、目の前の事象から解決すべき課題を見出し、主体的に考え、様々な立場の人と協働し、課題の解決を図っていくことができる資質・能力を子どもたち一人一人に育んでいくことが必要です。

全国連合小学校長会は、昨年度から「自ら未来を拓きともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を研究主題として設定し、学校経営及び日常の教育活動を通して組織的に研究・実践に取り組んできています。それを受けて、北海道小学校長会は「ふるさとに誇りと愛着をもち ともに未来社会の創造に挑戦する子どもを育てる学校経営の推進」を副主題として設定し、学校経営の責任者である校長の果たすべき役割と指導性の究明に取り組んできているところです。

本研究大会は、前年度のオホーツク・北見大会の成果を受け継ぎ、「世界をつなぐ千歳から 未来を創る子どもたちの笑顔と希望を乗せ新たなステージに歩み出そう！」を大会キャッチフレーズに、全道各地区の実践を学び合い、研究が深められるよう、全力で運営等に力を尽くしてまいります。

本日の記念講演では、北海道日本ハムファイターズ取締役、ファイターズスポーツ&エンターテイメント取締役事業統轄本部長の前沢 賢 様に「想いを叶えるリーダーのマネジメント～世界がまだ見ぬボールパークを目指して～」と題してご講演をいただきます。ファイターズのボールパーク建設に向けたリーダーシップやマネジメント等についてのお話は、学校経営にも大いに役立つものと期待しているところです。

私たち石狩管内小中学校長会は、総勢98名で昨年4月から準備委員会を立ち上げ、各種の大会準備を進めてまいりました。本大会が充実したものとなり、全道の「子どもたちの未来に明かりを灯す」ことにつながる大会となることを願っております。何かと行き届かない点があるかと存じますが、皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

結びになりますが、本大会の開催に当たり、ご指導とご助言を賜りました北海道教育委員会をはじめ、開催地であります千歳市及び千歳市教育委員会、並びに全国連合小学校長会、北海道小学校長会の皆様に心から感謝申し上げますとともに、コロナ禍が終息した際には、ぜひ皆様に千歳市へお越しいただける日が来ることを願い、大会実行委員会を代表しての挨拶とさせていただきます。

第64回北海道小学校長会教育研究石狩・千歳大会が開催されますことを心からお喜び申し上げます。

皆様方には、新型コロナウイルス感染症への対応に当たり、学校における感染症対策を講じつつ、子供たちの学習指導や心のケアなどに御尽力いただき、心から感謝申し上げますとともに、深く敬意を表します。

昨年度より、新しい小学校学習指導要領が全面実施となりました。また、今年度からは「GIGA スクール元年」ともいうべき学校における1人1台端末環境下での新しい学びとともに、学級編制の標準を段階的に引き下げる第一歩として、小学校第2学年における35人学級がスタートしています。皆様方におかれては、こうした環境を生かし、よりきめ細やかな教育活動を実践し、子供たちが、持続可能な社会の創り手となることができよう、日々御努力いただいていることと存じます。

こうした中、本大会が、「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進 ～ふるさとに誇りと愛着をもち ともに未来社会の創造に挑戦する 子どもを育てる学校経営の推進～」を主題に開催され、その優れた実践が共有・普及されることにより、小学校教育の一層の充実・発展が図られることを期待いたします。

文部科学大臣 萩生田 光一



祝 辞

北海道知事 鈴木直道

第64回北海道小学校長会教育研究石狩・千歳大会が開催されますことを心からお喜び申し上げます。

会員の皆様には、日頃から、本道における小学校教育の充実と発展に多大なるご尽力をいただいていることに、深く敬意を表します。また、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、オンラインによる開催にご尽力をいただいた関係の皆様には、厚く御礼申し上げます。

少子高齢化やグローバル化の進展、さらには、人工知能等の先端技術が産業や社会生活の様々な場面に取り入れられるSociety5.0時代の到来など、今、私たちは時代の転換期を迎えています。

こうした時代をたくましく生き抜く人材の育成がますます重要となる中、将来を担う子どもたちの可能性を引き出す教育の推進が一層求められています。

この度、「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を主題として本大会が開催され、創意と活力に満ちた学校経営ビジョンや豊かな人間性を育むカリキュラム・マネジメントなど、時代のニーズに即したテーマについて研究や協議を行い、道内各地の特色ある取組の情報を共有し、様々な視点から議論を深められることは、今後の小学校教育において大変意義深いことです。

子どもたちにとって、小学校の6年間は、生涯にわたり学習する基盤を培うための知識と技能を習得する重要な時期であり、道としても、子どもたちが新たな発想で夢や課題に挑戦するために必要な資質や能力を育むことができるよう、学校教育の充実に取り組んでまいります。

皆様におかれましては、新型コロナウイルス感染症の影響により子どもたちの学習環境が大きく変化する中、感染リスクを抑えるための対策や、不安を抱える児童へのきめ細かな支援などに取り組まれていることに対し、心から感謝申し上げますとともに、引き続き、子どもたちの健やかな成長に向け、高い見識と指導力を発揮いただきますようお願い申し上げます。

結びに、北海道小学校長会のますますのご発展、並びに本日ご参加の皆様のご健勝とご活躍を心からお祈り申し上げ、お祝いのメッセージといたします。

令和3年9月10日

祝 辞

北海道教育委員会教育長 倉本博史

第64回北海道小学校長会教育研究石狩・千歳大会の開催を心からお喜び申し上げますとともに、北海道小学校長会の皆様には、日頃から、本道教育の充実・発展に向け、御尽力いただいておりますことに、厚く御礼申し上げます。

さて、今般の新型コロナウイルス感染症の影響などにより、先行き不透明で予測が極めて困難な状況が続く中、学校教育においては、子どもたちが自分のよさや可能性を認め、他者と協働しながら様々な困難を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められています。

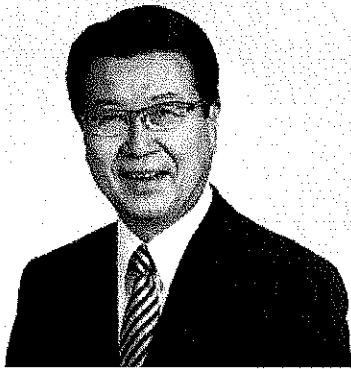
また、本年1月に取りまとめられた中央教育審議会の答申においては、誰一人取り残すことのない、持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現に向け、目指す姿を「令和の日本型学校教育」とし、「全ての子どもたちの可能性を引き出す個別最適な学びと、協働的な学び」の実現により、学習指導要領を着実に実施し、学校教育の質の向上を図ることが示されました。

そのため、各学校においては、校長のリーダーシップの下、客観的な数値等により課題を可視化し、実現可能な目標を設定するとともに、校務分掌等の工夫により全教職員の学校経営への参画・協働意識を高めながら教育課程を編成・実施し、その成果の検証・改善を行うなど、組織マネジメントを確立し、組織として教育活動に取り組むことが大切です。

このような中、本研究大会は、「自ら未来を拓きともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を研究主題に掲げ、「経営ビジョン」や「組織・運営」、「評価・改善」などをテーマとし、13分科会で研究発表や誌上交流が行われるなど、新しい時代に求められる学校経営の推進に向け、研究を深められておりますことは、誠に時宜を得たものであり、道教委といたしましても、大きな期待を寄せているところです。皆様におかれましては、引き続き、将来を担う子どもたちに、北海道の未来を創造するために必要な資質・能力を確実に育むことができるよう、力強いリーダーシップを存分に発揮いただき、本道教育の充実に御尽力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、北海道小学校長会の一層の御発展、並びに貴会の皆様の御健勝と御活躍を祈念いたしまして、私からのメッセージといたします。

令和3年10月



祝 辞

千 歳 市 長
山 口 幸 太 郎

この度は、第64回北海道小学校長会教育研究石狩・千歳大会の開催、誠におめでとうございます。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、本大会の開催にあたり創意工夫を重ねられた関係者の皆様のご尽力に敬意を表します。

今回、開催方法を集合形式からオンライン形式に変更されたことは、関係者の皆様には難しい判断であったと推測しますが、全道各地にここ千歳市から発信できることを誇りに思い、心より感謝申し上げます。

今、我が国は、人工知能やIoT等の技術革新によるSociety5.0時代の到来を迎えるなど、グローバル化の進展に伴う産業構造の変化や少子高齢化の進展に伴う就学・就業構造の変化などと相まって、学校教育を取り巻く環境が大きく変化してきております。

このような中において、各学校におかれましては、児童への学習指導や生活指導、各種の学校活動に加え、保護者や地域と連携した地域活動にも取り組まれており、ご参会の皆様には、その先頭に立って、これまで積み重ねてこられた経験をもとにリーダーシップを発揮し、魅力あふれる活力に満ちた学校づくりにご尽力されていることに、深く敬意を表する次第であります。

本教育研究では、「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を大会主題として、記念講演や各分科会誌上交流を通し、直面する様々な課題について研究協議を行うと伺っており、その成果が、今後、それぞれの地域や学校で発揮されるとともに、本研究大会での意見交換や情報共有が実践的な学校運営に資するものとなるよう期待をしております。

千歳市は、新千歳空港を核として高速道路や鉄道など、交通の要衝としての都市機能を生かしながら発展を続けており、本市の人口は、昨年度の国勢調査（速報値）では、「9万8,019人」で、前回平成27年調査から2,371人増加と、堅調に推移しております。

また、本年は、今後10年間の千歳市の発展計画である「千歳市第7期総合計画」のスタートの年であります。

学校教育においては、多様化する学習ニーズに対応し、時代に応じた学習活動を行えるよう、学習者用コンピュータや電子黒板などのICTを活用した分かりやすい授業の実践と活用能力の育成を図るなど、教育環境の充実に努めることを計画に掲げ、さらに、過大規模校である北陽小学校を分離し、令和4年度には「みどり台小学校」を開設するなど、子どもたちのための様々な施策に総力をあげて取り組んでいるところであります。

千歳市には、国立公園支笏湖やさけの遡上で知られる清流千歳川など、四季折々に変化する豊かな自然に加え、先日、世界文化遺産登録が正式に決定した「キウス周堤墓群」などの貴重な文化遺産がありますので、コロナ禍が落ち着いた際には、是非お越しいただき、千歳市の魅力をご堪能いただければ幸いです。

結びに、本研究大会の開催に当たり、関係各位のご尽力に深く敬意を表しますとともに、北海道小学校長会ますますのご発展とご参会の皆様のご健勝を心から祈念申し上げます、お祝いの言葉といたします。

(令和3年9月9日(木) 第3回理事研修会)

道 教 委 講 話

～ 新型コロナウイルス感染症と学校経営 ～
北海道教育庁学校教育局 指導担当局長

中 澤 美 明



令和3年度 北海道小学校長会第3回理事研修会

新型コロナウイルス感染症と学校経営



日時：令和3年9月9日(木) 11:25～
北海道教育庁学校教育局 中澤美明

【シート①】

ただいまご紹介いただきました北海道教育庁学校教育局 指導担当局長 中澤美明でございます。小学校長会の皆様には、日頃から道教委に対しまして特段のお力添えをいただきまして本当にありがとうございます。本日も貴重な機会をいただきまして本当に心から感謝申し上げます。本日のお話は、皆さんがご承知のことが多いと存じますが、確認の意味でお聞きいただければ幸いです。

校長の皆様には、この1年半、新型コロナウイルス感染症の対応で、学校の最高責任者として、正解のない難しい判断を求められる場面をたくさん経験されたと思います。今も修学旅行や学芸会、運動会の実施の判断で悩まれている方もいらっしゃると思います。また、自校で感染者や濃厚接触者が出れば学級閉鎖をすべきかどうかを判断することになります。こうした中、校長の皆様は、保護者の皆様、子どもたち、地域の方々、また教育委員会、保健所、そして首長部局と、様々な方々や機関等と連絡調整しながら陣頭指揮を執られ、ご苦労されていることと思います。校長の皆様には心から敬意を表し、感謝申し上げます。

コロナ禍は国難と言われる非常事態であります。道教委から300を超える通知を出しました。その対応も大変だったとっておりますが、この1年半、学校はどのような状況だったのか、校長としての感想を含めてお聞きできればと思います。自分の学校のことで管内のことで

根室の近藤校長先生、よろしくお願ひします。

<根室地区 別海町立上西春別小学校 近藤康校長先生>

ジェットコースターのような1年半でした。通知も様々あり、限られた中で子どもの資質・能力を育む効果的・効率的な教育活動は何かという流れが少しずつできてきたかと思えます。例えば学校行事ですが、これは時間と手間をかけ過ぎていた部分がありました。改めて目標を見直し、子どもたちに必要な点で見直しが進みました。この流れの延長で、今の状況に応じてICTの活用を含め、「主体的・対話的で深い学び」のスタイルを確立していければと考えています。喫緊の課題は、情報端末の持ち帰りが管内では課題になっています。根室管内1市4町24の小学校がありますが、通信環境の差を含め、学校よりも自治体の考え方、各自治体の差というのが大きいと感じております。中澤局長のレジュメに書かれているように、試行錯誤しながらできることを、柔軟性をもって進めていければと思っている現状であります。

コロナ禍は人の健康を害したり、行動を制限したりするなど、ネガティブな出来事ではありますが、学校経営では、見直す契機になったといったお話がありました。昨年度、同じようなお話を、勤務していた後志管内でも聞くことができました。この1年半は決して無駄にしない、糧にするといった捉え方が大切と考えています。それではパワーポイントのシート②をご覧ください。

校長会長のインタビュー等から

- これまでの学校の「当たり前」を見直す教育観の転換
- アフターコロナ時代のニューノーマルの構築
- 叢書を集めて新時代へ
- 校長としての主体性と指導性をもち課題解決へ
- 安全で安心な生活
- 限られた条件の中でいかに進めていくか
- 教職員のテンションを上げるためのリーダーシップ
- 教師の心に響く感謝や労いの言葉がけ

【シート②】

北海道通信の記事の中に小学校長会の吉田会長のインタビュー記事がございました。その中に心に残るキーワードがあったのでご紹介いたします。一部、中学校長会

の三浦会長のキーワードも入っています。

一点目は、「これまでの学校の当たり前を見直す教育観の転換」です。近藤校長先生のお話にもありましたが、学校行事など、これまで当然のこととして行われてきたことを、「本当にこれでいいのか」と確認し、見直す姿勢を強調されています。

二点目は、「アフターコロナ時代のニューノーマルの構築」とあります。目の前の対応で校長先生は大変だと思いますが、未来を見据え、コロナ後は単純な逆戻りにはしない姿勢を大切にされています。

三点目は、中学校長会のキーワード、「叡智を結集して新時代へ」です。小学校長会も全道の声を聞きながら結集していくというお話がありましたが、非常時こそ結束して知恵を絞り乗り越えていくという姿勢が大切です。

四点目は、「校長としての主体性と指導性をもち課題解決へ」であります。校長の皆様には責任はありますが権限もごぞいます。様々な方向性が行政から示されていますが、それを自分の学校に合わせて具体化し、主体性をもって進めてほしいと思っています。また先生方を同じ方向に向けていくという指導性も必要であります。

五点目は、「安全で安心な生活」です。学校は子どもにとって安全で安心な学び舎でなければなりません。いじめられる不安、コロナ感染の心配で心がいっぱいであれば、学力の向上も豊かな心の育成もできません。

六点目は、「限られた条件の中でいかに進めていくか」です。取組が進まない学校は、あれがない、これがないなどの理由を並べて「無い物ねだり」する傾向があります。一方、前に進む学校には与えられた条件の中で、環境を最大限に活用して最大の成果をあげようとする校長先生の姿勢があります。本校はミドルリーダーがいないから、経験の浅い先生しかいないからできないなどの言い訳はせず、目の前の構成メンバーでどうやって成果をあげるか工夫する、前向き感のある校長先生は良い学校経営をされています。

七点目は、「教職員のテンションをあげるためのリーダーシップ」です。パフォーマンスをあげていくためには、先生方の心に火をつけることが大事ですし、同じ方向に向かうようにすることが大切です。大変な業務でもやり甲斐を感じて取り組んでもらい、満足感を感じてもらい。こうしたことがこれからの時代に一層求められるリーダーシップだと思います。

最後は、「教師の心に響く感謝や労いの言葉がけ」です。学校経営においても理と情のバランスが必要だと思います。私は学校訪問させていただく中で、1時間目から5時間目までずっとコロナの感染に気を遣って子どもと一緒に過ごされている先生方に対して本当に頭の下がる思いです。こういった先生方に心から感謝と労いの言葉を、伝わる

ようにかけていくことも大事だと思いました。

校長会の皆様には、今後もこうした7つの姿勢を大事にさせていただきますようよろしくお願いいたします。

シート③をご覧ください。本日は次のことを申し上げます。

内 容

・社会に開かれた教育課程とカリキュラム・マネジメント

・クライシスマネジメント（長期戦への備え）



【シート③】

一点目は、コロナ禍において「社会に開かれた教育課程とカリキュラム・マネジメント」をもう一回確認したいと思います。二点目は、「クライシスマネジメント（長期戦への備え）」です。危機が起こった時の対応についてです。

まずシート④、学習指導要領の前文をご覧ください。

小学校学習指導要領(平成29年告示)

(略) これからの学校には、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら**様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。**このために必要な教育の在り方を具体化するのが、各学校において教育の内容等を組織的かつ計画的に組み立てた教育課程である。(※ 前文から抜粋)

【シート④】

太字の所を改めて読むと、コロナ禍を予測していたかのような文章であります。「様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」

まさに、今、大きな社会的変化が目の前で起こっているわけで、これを乗り越えることが求められています。

コロナ禍により、子どもも大人も大きな社会的変化の中で生じる様々な課題をどのように乗り越えていくかは、教科書だけでは学べない、体験の中から生まれる学びです。

その時に、ただ時間が経って、コロナが収まるのを待つのではなく、自分の身を守るにはどうしたらいいのか、どのように生活を変えていったらいいのかなどを考えることが大切です。また、近藤校長先生や校長会長のインタビューの言葉のように、ポジティブな発想で考えることや工夫をしながら困難を乗り越えていく営みこそが、私は学習指導要領の前文に示されている求めを実現する


ことではないかと思えます。その実現のために必要なのが、「教育課程」ということです。

次のシート⑤「社会に開かれた教育課程とカリキュラム・マネジメント」をご覧ください。

社会に開かれた教育課程とカリキュラム・マネジメント

・実社会の変化に対応し、未来社会を見据えた教育課程を（地域）社会と共有（→ ICTの活用）

・コロナの感染状況に応じた教育課程の不断の見直し（PDCAサイクルの確立、教科横断的）

→ 子供、先生にとって重要かつ貴重な経験 

【シート⑤】

皆様方に問います。育成すべき資質・能力というのはいつの時代に必要なものをイメージしていますでしょうか。

今の時代を生きるための資質・能力もありますけれど、もっと大事なものは、子どもたちが将来活躍する2030年以降の社会を生き抜くための資質・能力をイメージすることです。こう考えると学校の教育課程は、未来社会を見据えたものであることが重要です。

各学校の校長先生は、ポストコロナ、10年後に世の中がどうなっているのかを見据えて教育課程を編成していくわけですが、義務教育では国語・算数など内容はおおよそ決まっているので、総合的な学習の時間や生活科、特別活動など、学校の裁量を活かしやすい場面で、特色を色濃く出していくことが大切です。

教育課程の実施では、学校で重視している資質・能力が効果的に育成されるよう、様々な教科の中で、教員がその資質能力を特に意識して指導することが重要です。

コロナ禍の中で特に注目したい資質・能力は、情報活用能力です。コロナ禍でも、子どもたちが活躍する社会でも、ICTを活用できることは重要です。コロナ禍でGIGAスクール構想が前倒しになり、急速に進められました。この波に乗って、学習の基盤である情報活用能力の育成を促進していただくことをお願いします。今がこの力を伸ばす好機です。臨時休業時のオンラインによる学びの保障はもとより、「未来を見据えた教育」といった意味でも、今このタイミングで促進していただきたいです。

次に、「カリキュラム・マネジメント」です。コロナ禍の感染状況の中で、いろいろな通知が発出され、制限と緩和が繰り返されています。学校は、その都度、与えられた条件や環境の中でいかに教育効果を高めるかといった視点でカリキュラムを見直しています。まさに、これがカリキュラム・マネジメントです。学校では、大変ご苦勞をなさっていますが、コロナ禍の対応によって、

PDCAサイクルを回しながら教育課程を改善することを体感しているのです。

シート⑤の下に書いておりますけど、先生にも子どもにも、生きる力を高めるために非常に重要な経験だと思えます。こうしたな経験を例に挙げ、校長先生からカリキュラム・マネジメントの意味や、今が体感する好機であることなどについて解説していただければ幸いです。

クライシスマネジメント(長期戦への備え)

・感染予防（未然防止）の取組は充実

・危機的な事態に直面した時の対応を想定
「感染は起こりうる」→ オンライン学習 → 安全・安心

※ 学びの環境づくりに汗を流す大人の姿は子供に好影響
※ 「学ぶこと」や「授業」に対する価値の高まり

【シート⑥】

シート⑥は、「クライシスマネジメント（長期戦への備え）」です。コロナ禍は早急に収束してほしいのですが、今後また新たな変異株が出現することも考えられます。そのことにより新たなワクチンが必要になるなど、様々な事態が想定されます。コロナがインフルエンザと同様に対応できるようになるためには、まだ時間がかかるのではないのでしょうか。こう考えると、コロナ禍は長期戦だと考えています。

学校訪問をしますと、感染症対策のリスクマネジメントなど予防の取組については、学校の先生方が本当によくやってくさっています。消毒、換気、密の回避、手洗い、リスクの高い教育活動への配慮などのきめ細かに対応され、頭の下がる思いで先生方の取組を拝見しています。これは校長先生のご指導のおかげであります。こうした学校にお子さんを通わせる保護者の皆様も安心していることと思います。

一方、危機が発生したときのクライシスマネジメントについてはいかがでしょうか。例えば、いじめのことを考えていただければと思います。「いじめはどこでも起こりうる」と考えられ、もし起こったらどうするかは、各学校で想定していると思います。コロナの感染についてもどこでも起こりうることです。したがって、いじめと同様、事前に想定して対応をシミュレーションしておく必要があります。

その際、長期戦に備え、学びの保障の準備を進めることは、クライシスマネジメントで重視すべきことでもあります。具体的には、オンライン学習ができる環境を整え、準備しておくことです。このことが、真に子どもを大事にすることだと思えます。

シート⑥の※印に書いてある「学びの環境づくりに汗

を流す大人の姿は子供に好影響」については、何人かの校長先生から伺った話です。オンライン学習の環境整備をすることは、予算確保や通信環境の設定などで先生方や教育委員会、保護者の皆様に大変なご苦勞をおかけします。しかし、子どもの学びの環境づくりに汗を流す大人の姿は、感謝、創意工夫、学習意欲などの観点から、必ず子どもにより影響を与えるはずだとおっしゃっていました。

また、ある校長先生は、こうしたオンライン学習の整備に勞を厭わず、授業や学びを大事にする大人の姿勢は、「学ぶこと」や「授業」に対する子どもの価値観を高める。「勉強しなさい」ということより効果的かもしれない。

本当に子どもを大切に思うのであれば、臨時休業、学級閉鎖中であっても、学びを保障していただきたい。苦勞はありますが、学校の先生方で力を合わせて、学びの環境づくりに取り組んでいただくことを切に願っています。

さきほどから、ICTのことを度々話題にしておりますが、学校や地域の状況をお聞きしたいと思います。地方に行くとなかなか通信環境など大変なことがあります。ICTの校内環境について情報をいただけますでしょうか。

<宗谷地区 稚内市立潮見が丘小学校 杉本浩一校長先生>

管内的な状況をお話させていただきます。一つは光回線の整備状況です。稚内市ですと宗谷岬の周辺が、非常に光回線が細くなっていて、新規に光回線が引けない状況にあると聞いています。そういう意味では基幹的な整備も必要かなと思っています。この1年半、宗谷管内でも劇的にICTの環境が整ってきています。稚内市では9月中旬にタブレット端末を持ち帰って、家庭での接続テストをするところまで進んでいます。そういう意味では、一步一步の前進は確実に見えていると思っています。

しかし、タブレット端末貸し出しに関わっての課題がいくつか出ています。各自治体によって、取り扱いが大きく違うと聞いています。SIMを含めて通信料を保護者が負担する市町村、それから市町村がSIMを用意する町村、その中でも通信は市町村が払う所と、一日いくらという形で保護者に負担していただくなど、いろいろな差が出てきているところです。いろいろなパターンの中で、できるだけどの市町村も同じようになればと思います。

また、稚内市ではつなげられない家庭について、学校に来てつないで学ぶ方法が進んでいます。ルーターが届かないから学びを止めない姿勢ではなく、いろいろな方法を使って学びを止めない方法を検討しているところです。

それぞれの自治体で状況も違いますけれど、通信料金

やWi-Fiルーター、回線などの環境の関係で、どうしても家庭でオンライン学習ができない子どもは、学校に来てもらい、広い部屋で少ない人数で、オンライン学習を行うなど、いろいろな方法を考え、工夫されている自治体もありますので参考にさせていただきたいと存じます。

道教委ではオンライン学習の環境が整うよう国に要望をしているところで、今後も続けて要望していきます。地域や家庭により環境が異なりますが、市町村教育委員会との連携を強化して、なんとかオンライン学習を一步でも前に進め、子どもたちの生活の中で根付いて使えるようお願ひしたいと思います。

最後のシート⑦は、キーワードです。

おわりに

【キーワード】

試行錯誤、臨機応変、柔軟性、好機、早期対応（≠朝令暮改）、閉塞感の打破、人材育成



【シート⑦】

コロナ禍の取組は、まだまだ続きますが、トライアンドエラーで、多少の失敗はあっても臨機応変に進めていくことが大切です。先のことはなかなか予測できないので、考え方は現状に合わせて柔軟に対応していく。なるべく悲観的に考えず、好機と捉えて取り組んでいく。様々な通知が発出され、その都度学校は様々な変更を余儀なくされて、皆様の中には朝令暮改に振り回されていると感じる方もいらっしゃると思いますが、子どもの命と学びを守るための早め早めの対応ととらえていただければと思います。

さらに、校長先生のお力で、閉塞感を打破するとともに、こうした、非常時を学校全体で乗り越えることで先生方を上手に育てていただくことをお願いします。力量を高めるチャンスです。

今後、学校経営や道教委施策について、ご不明な点やご相談があれば、教育局では、義務教育指導監が、本庁では石川教育指導監が対応いたしますので遠慮なくお問い合わせください。

なお小学校長会で、ICT部会をつくっていただいて本格的な取組を進めると伺いました。道教委でも是非、部会の情報を共有させていただきたいと思っております。

終わりになりますが、今後も小学校長会と道教委の連携を一層深め、同方向のベクトルで取り組むことを願ひするとともに、会員の皆様のますますのご健勝、ご活躍を祈念いたします。本日は、ご清聴ありがとうございました。



当 面 の 諸 課 題

全国連合小学校長会長

大 字 弘 一 郎

第64回北海道小学校長会教育研究石狩・千歳大会の開催に当たり、本当に多くの参加を得て、このように素晴らしいオンラインで実施していただけることに心から敬意を表します。ありがとうございます。

大会会長の吉田校長先生、大会実行委員長の小松校長先生をはじめ 北海道小学校長会の校長先生方、この新型コロナウイルスの感染症拡大という状況の中、今まで味わったことのない厳しい状況の中で、大会を開催に導いていただきました。大変だったと思います。本当にありがとうございます。

本日は、教育における当面の諸課題ということでお時間をいただいております。大きく2つに分けてお話をさせていただきます。

前半部分は、この新型コロナウイルス感染症対策と教育活動の両立、それと学びの保障や学びを止めないためにどうするかという、まさに今、目の前に直面している課題についてです。

後半部分は国の動向についてお話をさせていただきます。2年ぶりに実施されました全国学力学習状況調査や令和4年度の文部科学省の概算要求などについてお話をさせていただきます。

どうぞよろしく願いいたします。



画面には、世田谷区立下北沢小学校のホームページが写っています。本校は、東京都世田谷区の北のはずれにあります。だいたい720人ぐらいの児童が通っている学校です。6年前に統廃合し、2校が1校になりました。ま

たその後、4年前にさらに統合して、結果的には3校が1校となり、下北沢小学校という新しい名前になっています。

<ホームページの「学校日記」>

現在、世田谷区や本校では、分散登校を実施しています。クラスをAとBのグループに分けて、Aグループが来る日、Bグループが来る日という形で、2つに子どもたちが分かれて授業を進めています。

<給食の様子>

市松模様のように座っている子、座っていない子というような形になっています。給食の時だけは、このような形でパーテーションを立てて飛沫の拡散の防止に努めています。通常の授業の時には、このような形はっておりません。どの学校も同じだと思いますけれども、黙食が徹底されていて、特に1年生と2年生は、「小学校の給食ってこういうものなのかな。」というふうに思っているのではないかと思うと、ちょっと悲しい気もしています。

<2年生>

他の学年もそうですが、分散登校AグループとBグループに分かれておりますので、Aグループの子が登校している時は、Bグループの子は自宅です。ですから、学校の授業の様子をオンラインで家庭に配信をしています。画面に見えるのが家庭でオンライン授業を受けている子どもたちの映像となります。後ほど、このオンライン授業に関する課題についてもお話をしたいと思っております。

教員は、配付されたiPadの端末に向かって、オンラインで参加している子どもたちに話しかけ、教室全体にも話しかけるというようになっています。その後、机間巡視を行いますので、ライブで授業を受けている子どもたちと、オンラインで受ける子どもたちのどちらにも気をつかわなければいけないので、かなり大変で、「疲れました。」という声も聞こえてきます。

<特別支援学級>

本校は特別支援学級、知的固定の設置校ですので、その様子です。知的固定の子どもたちは全部の人数も少ないので、分散登校はせずに毎日登校という形を取っています。

<4年生>

教員は、iPadに向かって様々な指示を出して授業を進めるという形をとっています。教室にいる子たちは、担任の指示を受けてそれぞれ授業を進め、オンラインで受けている子どもたちは、画面共有をしたものを自宅のパソコンで見ながら授業を受けるという形式をとる教員もおります。

<5年生>

授業中に教室で発言している子どもがいる場合は、端末のカメラを切り替えてその子が映るような形にして、オンラインで受けている子どもたちにも、発言している子どもがしっかりと捉えられるような工夫を行っています。

<6年生>

漢字ビンゴに挑戦している風景です、登校して来ている子とオンラインの子をどちらもうまくつなぎながら、この漢字ビンゴが進んでいきます。先にビンゴになるのが結構オンラインの子だったりするので、教室からも歓声がかきこえてきたりします。なかなか楽しい授業を進めています。

<1年生>

朝の会では、担任が呼びかけてオンラインの子たちにも健康観察と一人一人元気な挨拶をしているところです。1年生の子たちがオンラインで接続をしたり授業に入ってきたりするのは非常に大変です。1年生の先生方が子どもたちに配ったプリントは相当工夫がされていて、例えば「iPadを立ち上げてくださいね。その中のTeamsのここをクリックするんだよ。そうするとこの下に英語が出てくるので、その英語をポチッと押しなさい。」というような解説が、全て絵付きで子どもが見てわかるような形で配られています。そうは言っても接続出来ない家庭があり、かなり電話の問い合わせなどもあるという状況です。

<3年生>

オンラインの様子です。分散登校中の朝の会の風景で、

朝の挨拶と健康観察を行っています。

このように見ていただきましたが、実際には様々な課題がありますので、そのあたりも含めて少しお話をしたいと思っています。

まず1番最初に課題になるのは、教員のスキル、またはこのオンライン学習に向けての準備への負担、授業を続ける時の疲労感などが大きな課題になっています。特に教員のスキルに関しては、なかなかこういう授業をしたことがありませんので、準備には一定の時間がかかるかと思っています。

本校では、昨年の臨時休校期間から、このような形の授業を想定した研修や環境整備を続けてきました。ここに来るまでに1年以上はかかっています。臨時休校期間は原則、在宅勤務をさせておりましたので、その在宅勤務を利用して、少しずつオンラインによる打ち合わせだったり職員会議といったものを入れたりしてきました。それで先生方もこのオンラインによるやり取りに慣れてもらうようなことを、昨年の4月、5月ぐらいから進めてきました。

もう1つは、今はどうしても情報のやり取りがメールになりますので、そのメールからではなくて、クラウド上にいろいろなものを取りに行くような習慣をつけることも行ってきたところです。また、校内研究は昨年度から全てICT機器の活用に取り替えて、教員のスキルを上げる、知識を増やすということに取り組んでまいりました。そうは言っても、簡単にスキルが上がるわけではなく、週に1回や2回程度、夕方15分の短い研修を入れて、「これは明日の授業で使えるよ、やってみようね。」というようなスポット的な実技研修を数多く取り入れています。本校には「24時間ルール」というのがあって、研修で学んだスキルは24時間以内に必ず使うことを徹底しているところです。

次の課題は、やはり子どもの発達段階によって非常に扱いが難しいというところがあります。まずは、どの程度オンライン授業に集中できるかというあたりも、常に探っている状況です。また、学年によってパソコンのスキルが一体どの程度あるのかといったあたりも、授業を組み立てる時に難しい状況です。1年生、2年生はなかなかキーボード操作ができませんので、タッチパネルを利用して授業するような工夫も必要になってまいります。やはり今回、この授業をこういう形で実際に行ってみて、教員が非常に懸念しているものが、「オンラインで受け

ている子どもたちの学習の定着度がしっかりと把握できない。」「子どもが本当に分かっているかどうかがあてにならない。」ということが、非常に不安であるという話をしております。私もその通りだろうなと思います。教員は普段であれば目の前の子どもたちを見て、「この子は、いまいち分かってないな。」ということであれば、その都度その都度確認し、個別に支援をするということをしてしております。けれども、この形式ではなかなかオンライン先の子どもの定着が難しいので、今後改善していかなければいけないということと、実際にオンラインで入ってきている子どもたちの中には、どうしてもその能力差があります。自分たちでオンライン学習にしっかり入っていける子どももいれば、オンラインでは集中できない子ども、定着の難しい子ども、そのような学力の二極化、学力差がこの授業によって大きくなるのではないかといったことも、教員の懸念材料です。

また、不登校や登校渋り傾向の子への影響も懸念をしています。実際に、高学年の子どもで不登校傾向だった子がオンラインで参加して、登校に繋がったというケースもある一方で、登校渋り傾向の子どもが「この形式で授業を受けられるんだ。」ということで、学校に足が向かなくなったというケースも起きています。このあたりも今後検討しなければならない内容で、なかなか難しいところです。

また、実際に体育の授業も分散登校ですから行っているのですが、この体育の授業を配信するというわけにもいきませんので、その裏で子どもたちに何か学習をさせる準備も教員が苦慮しているところです。ちなみに本校は10月2日の土曜日に運動会を行います。運動会は全てYouTubeを使って、家庭や学校関係者にライブでの配信を昨年度から進めております。このことによって、「海外出張している父親が子どもの活躍を見られた。」とか、「地方に住んでいるおじいちゃん、おばあちゃんも孫の元気な姿を見られた。」などという嬉しい声も聞こえています。

次に、通信環境面の課題は、あげなければいけないかなと思います。どこの学校においても、この高速大容量のWi-Fi環境の整備ということで、工事などが進んできたとは思いますが、高速大容量といっても実際に動かしてみると、「なかなか文面どおり、額面どおりではない」ということもあるかと思えます。オンライン授業を行う前には、ぜひこの通信環境の確認というものもしっかりと行ってほしいと思っております。本校も実際にドーンとやろうと思った時に、全校で一斉に700名がトライアルし

てつなぎましたが、全く動きませんでした。2学年ずつに人数を落としてトライアルした時も、全くつながらないという状況が起きました。ですから、大容量とはいえ、本当にどのあたりまでつながるのかということをしかりと学校現場として確認をする必要があります。また、容量が少ない場合は、教育委員会にしかりと伝えて改善を図っていくということも必要だと思います。また、授業や配信などに必要可能な端末の数、またはスペックも確認する必要があると思います。学校によっては、教員用の端末が配付されていないというようなケースもあると聞いています。子どもには一人一台だから国の45,000円予算で全部配られると思うのですがけれども、自治体によっては教員用が配られていない、そのためになかなかやろうにもやれないという声も聞いていますので、そこも準備としては重要だと思っておりますし、周辺機器の充実というのも欠かせないと思います。例えば、教員用端末の映像を教室の大きな画面（モニター）に飛ばす時に、何の機器もないと飛びません。本校ではApple TVという機器を接続して、映像を教師用端末から飛ばすようにしています。このようにすると、端末をどこに持って行っても授業が成立します。このような周辺機器を用意しておかないと、テレビと配信用の端末をラインでつないで配信するということになりますから、かなり授業がやりづらくなるので、周辺機器も様々な工夫をしていく必要があると思っております。マイクなどもできるだけいいマイクをそろえた方が、教員の喉への負担なども含めて考えてあげるといいのかと思っております。

音楽の授業は、例えば1組で音楽の専科教員が行い、その映像を家庭にも配信をするのですが、それだけではなくて隣の2組にも配信をして、1組・2組同時に授業を受けるということを行っています。このようなオンライン授業を行うと、教師の授業準備の負担が非常に大きくなります。教科担任制なども考慮する必要がありますが、そのようにしていかないと、教師の負荷があまりにも増えて、長続きしないというような状況も生まれます。このように1人の教員が2クラスを担当して、それをオンラインで配信する、隣のクラスにも配信するような事も必要になってくるのではないかと考えています。

5年生ですが、先ほど話したように接続器がありますので、教員が端末片手に子どもの様子なども撮りながら配信ができる様子がホームページでご覧いただけるかなと思います。

また、今回やってみて非常に困ったのは、接続などのトラブル対応です。どれだけ事前に指導をしても、家庭

から実際に「ビデオ会議に接続できません。」という問い合わせが、学校に少なからず寄せられます。学校の電話がヘルプデスク化するようなどころがあり、それへの対応をどう事前に準備をしておくかといったあたりも大きな問題かなと思います。

また、家庭の状況も大きな課題になってくると思います。一つは家庭の通信環境が整っているのか、また、子どもをオンライン学習の時に家庭に置いておけるのかという家庭の状況に関しても、様々な配慮が必要ではないかなと思っています。

今回、こういう形で本校の様子をご覧いただきながら、オンライン授業の課題などもお話をさせていただきました。ただ、非常にこのオンライン授業は、「子どもの学びを止めない」 または「学びを広げる」という点では、可能性のあるものだと感じています。ただ、このA・Bグループに分けた分散登校でのハイブリッドの配信は、あまりお勧めできません。これは、教師への負担が非常に大きいです。ですから、例えば陽性のお子さんや濃厚接触で登校できない子に対してオンライン配信をする、基本は通常授業で数人にオンライン配信をするという形の方が、教員もやりやすいかなと思いますし、学級閉鎖という時には完全にオンラインの方が教員にかかる負荷は少ないかなと思います。この形は、やってみてなかなか厳しかったということ、最後にお伝えしておきたいと思います。

本校のホームページを見ていただきながらの話になりました。毎日、校長である私が学校を授業観察する中でホームページにリアルタイムでアップをしていて、学校の状況を保護者や地域に伝えています。

第64回北海道小学校長会教育研究石狩・千歳大会

学校における当面の諸課題

令和3年9月10日（金）

全国連合小学校長会長 大学弘一郎

では、次に、学校における当面の諸課題ということでお話をさせていただきます。

2

1 令和3年度 全国学力・学習状況調査

(1) 教科に関する調査結果

- 都道府県の平均正答率の差は小さい。(10ポイント程度)
- 休校期間の長さで平均正答率の関連性は見られない。
- 課題 「複数の文章や資料等を結び付けて必要な情報を見付けること」
「日常の事象を表、式、グラフなどを用いて数学的に解釈したり説明したりすること」

まずは、令和3年度の全国学力・学習状況調査についてです。今回、これをこのような形で取り上げた理由は、2年ぶりの調査で大変注目された調査であるということ、学習指導要領が全面実施になったあとの初の調査であるということ、主体的・対話的で深い学びやGIGAスクール構想、コロナの影響、経年変化などが取り上げられていて、全国学力・学習状況調査がまさに今の学校の当面の課題とリンクしていることから、まずこの調査についてお話をさせていただくことにしました。

教科に関する調査結果については、10月に文科省が説明をし、授業改善に向けた説明会、手引きなども出すということですので、詳しくはそちらだと思いますが、ポイントだけお話すると、都道府県の平均正答率の差は小さく、10ポイント程度の中に収まっています。休校期間の長さで平均正答率の関連性は見られないと述べられていますが、これに関してはかなり分析が必要であろうと、私は思っています。「こう簡単にあっさり言われても困るな、学校現場としては。」というところです。例えば、それぞれの学校が夏休みを大幅に短縮したり、土曜授業を行ったり、行事を削減したり、指導内容を重点化されたりしたと思います。そのような学校の様々な努力があってもその「平均正答率の変化がない」というところだと思います。

今、申し上げたように、学校は努力をしているものの、実際には子どもの心身の成長や発達に何らかのひずみを生んでいるのではないかとということも、危惧をしているところです。

一例を申し上げますと、昨年4月から5月に実施された国立成育医療研究センターの7歳から17歳を対象にした調査では、「最近集中できない」「なかなか寝付けない」「夜中に何度も目が覚める」という症状を訴える子どもが約75%いたということです。4人に3人は何かの症状を訴えていて、これはやはり休校期間と何らかの関係があると考えざるを得ないかなと思っています。

3

(2) 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善①

○「授業では、課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」

■肯定的に回答した児童の割合が 78.3%

■肯定的に回答した児童ほど各教科の平均正答率が高い。

○学校質問紙における同様の質問

■肯定的に回答した小学校の割合が 86.4%

■質問に肯定的に回答した学校ほど、全ての教科において平均正答率が高い。

5

(3) ICT を活用した学習状況①

○ICT を活用した授業を、「ほぼ毎日実施した」

■小学校の割合は 63.9%と大きく増加。

○「ICT 機器を他の友達と意見を交換したり、調べたりするために、どの程度使用しているか」

■「ほぼ毎日」と回答した児童は 10.2%。

○「学習の中でコンピュータなどの ICT 機器を使うのは勉強で役に立つと思うか」

■肯定的に回答した児童は 94.5%と高い割合。

次は、質問紙調査から何点かお話をしたいと思います。

次に、ICT を活用した学習状況に移りたいと思います。学校質問紙調査からの結果です。

まずは授業改善です。主体的・対話的で深い学びの視点から、「授業では課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」というのを児童に聞いています。肯定的な児童が78.3%、肯定的に回答した児童ほど、各教科の平均正答率が高いという結果になっています。学校に聞いた同様の質問でも、同じような傾向が出ていて、どの学校もコロナ禍ではありながら主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に取り組んでいて、かなり努力をしたという結果が出ています。

「ICT を活用した授業をほぼ毎日実施した」という学校は、小学校の53.9%ということで、半分を超えて大きく増加をしたという結果が出ています。

ただし、私はこの文科省の質問紙調査は、実態把握の部分と文科省が伝えたいメッセージを、ある程度、意図的に出しているという部分もあるのではないかと考えていて、この数値は今後の文科省が、「この視点での授業改善をしっかりと進めてくださいね。」という思いがかなりあるのかなと思っています。

「ICT 機器を他の友達と意見を交換したり調べたりするためにどの程度使用しているか」は、ぐっと下がって、ほぼ毎日と回答した児童は10.2%、本校もこのあたりがやはり大きな課題です。

「ICT の機器で友達同士が交流しながら学ぶ、学び合う、教え合う」ということは、なかなかまだ進んでいないというところでは。

「ICT 機器を使うのは勉強で役に立つと思いますか」ということに対して、肯定的に回答した児童は94.5%、子どもたちはやはりこの ICT、コンピュータを使った学習に大きな期待をもっているということが分かります。今までなかなか学習に気持ちが向かなかった子どもも、コンピュータなどを活用することで意欲が増すのではないか、ということも考えられる結果だろうと思います。

4

(2) 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善②

○「児童自ら学級やグループで課題を校定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動」

■小学校では 82.4%が校内研修を実施。

■授業においても 87.7%の小学校が、このような活動を取り入れていると回答。

○「児童は、話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができているか」

■肯定的に回答した小学校は 76.0%

■肯定的に回答した児童は 78.8% ※どちらも増加。

6

(3) ICT を活用した学習状況②

○「児童一人一人に配備された PC・タブレット等の端末を、どの程度家庭で利用できるようにしているか」

■毎日持ち帰って、毎日利用	3.4%
■毎日持ち帰って、時々利用	3.6%
■時々持ち帰って、時々利用	13.8%
■持ち帰らせていない	54.5%
■持ち帰ってはいけない	18.6%

※令和 2 年 10 月までに導入した自治体とそれ以降の自治体では、前者の方が、「持ち帰って利用させている」割合が高い。

こちらは、対話的な学びの方ですけれども、このあたりもかなりの学校で校内研修を実施し、授業においてもこういった活動を多くの小学校が取り入れるという結果が出ています。

「児童一人一人に配られた端末をどの程度家庭で利用できるようにしていますか」という質問です。毎日持ち帰って、毎日利用が3.4%、毎日持ち帰って、時々利用が3.5%、時々持ち帰って、時々利用が13.8%と、家に持ち

帰らせて何らかの形で活用しているというのが全体の2割です。これは多い数値なのでしょうか、少ない数値なのでしょうか。先ほどお話ししたオンライン授業なども今後視野に入れると、家庭への持ち帰りは、私は必須だと思います。本校は（毎日持ち帰って、毎日利用の）3.4%の中にあります。メリットとしては、例えば、宿題などの家庭学習の幅がかなり広がるということもありますし、はじめにタブレットに課題を飛ばしておいて、それを家で学習させて学校での授業につなげるといったような活動にも使います。または、連絡手段としても子どものタブレットは活用できますので、ペーパーレス化も進むと思います。

一方で課題もあります。間違いなくあります。本校に寄せられる声で一番深刻なものは、「子どもが配られたパソコンを使うのをやめられないので、学校で何とかして欲しい。」という声です。少なからず来ています。保護者が「もうやめなさい、それを使うのは。」と言っても、子どもが止められない状況になっているという声も聞かれます。または、極力制限をかけない状態で端末を配っておりますので、学習以外での不適切な使用についても、多くありませんが声が聞こえている状況です。または「破損した」「ランドセル自体が非常に重い」というような声も聞こえています。現在、一人一台端末の導入期ですので、様々な課題やトラブルが起きるのは仕方がないことですが、持ち帰らせてやってみないと何がトラブルにつながるのかということも、なかなか教員も実感としてつかめませんので、できる限り家庭への持ち帰りもご検討をいただければと思っています。

(3) ICTを活用した学習状況③

- 「1日当たりのテレビゲームをしている時間」
 - 児童生徒とともに増加
 - 「1日当たり1時間以上」 75.9%。
 - 「4時間以上」 15.4% ※どちらも大きく増加
- ※小中学校とも、1日当たりのテレビゲームの時間が増えるほど、各教科の平均正答率は低い傾向。
- ※学校の授業以外の勉強時間は、回答状況に大きな減少は見られない。（外での活動が減っているのではないかと）

のすごい数だなと思って驚きました。

ここには載せていませんが、「ICT機器を勉強のために使っているか」という質問があって、5人に1人は全く使っていないという回答をしています。30分未満が約30%ですので、半分の子どもは30分以下しか勉強のためにはICT機器を使っていないというような結果もあり、この一人一台端末をこれからどう活用するかということは、大きな課題だと思っています。

それから、（※の部分）学校の授業以外の勉強時間は回答状況に大きな現象は見られていないという結果が出ているようです。テレビゲームの時間は増えているけれども、勉強時間はそれほど少なくなっていない。私なりに考えてみたところでは、外での活動が減っているって言うことは言えるかなと思っています。

児童の視力が「今年も悪くなった。」ということが、毎年更新され続けています。視力と外での活動は関係があるというようにも言われていますので、やはり子どもが外で体を動かして活動するというのを、どう意識付けて実際に結びつけるかというあたりも、学校の大きな課題ではないかと思っています。

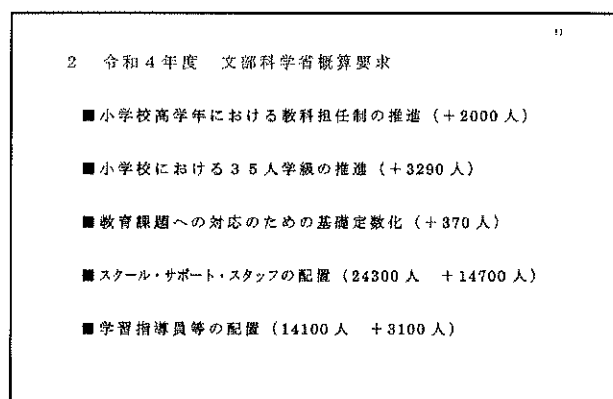
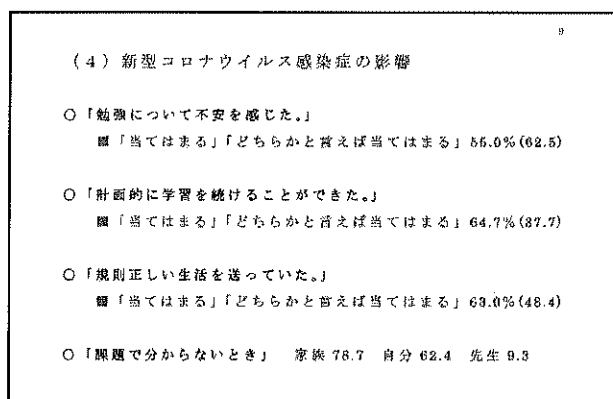
(3) ICTを活用した学習状況④

- 教員が ICT 機器の使い方を学ぶために必要な研修が実施されているほど、ICTの活用頻度が高い。
- ICT活用に必要な研修機会が「ある」「どちらかといえば、ある」と回答した学校は 84.8%。
- ICT機器の活用について、技術的にサポートできる体制が整備されているほど、ICTの活用頻度が高い。
- サポート体制が「ある」「どちらかといえば、ある」は 83.9%。

このあたりは研修のことが書いてあります。教育委員会とにかくがんばって欲しいのは「研修をしっかりやってほしい」ということと、「ICTの支援サポートができる人材を学校にしっかり派遣してほしい。」というこの2点です。

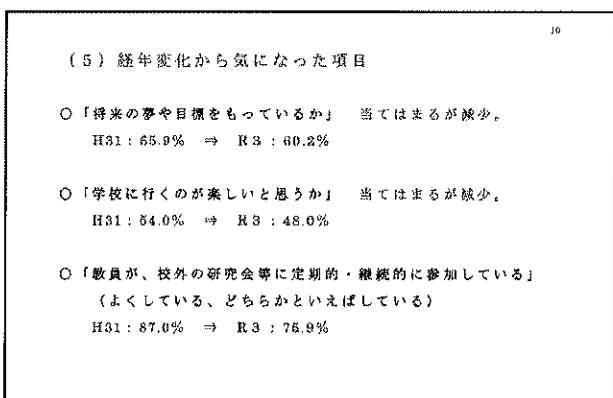
特にオンライン授業を進めようと考えたら、技術的なサポート体制が必須であると思っています。それぞれの校長会で各教育委員会にぜひ強く働きかけていただきたいと思っています。

次です。1日あたりのテレビゲームをしている時間が児童生徒ともに増加という結果が出ています。1日あたり1時間以上という子どもが75.9%、4人に3人は1日1時間以上やっていて、そんなにやっているんだなと思ったのですが、4時間以上は15.4%、4時間というの



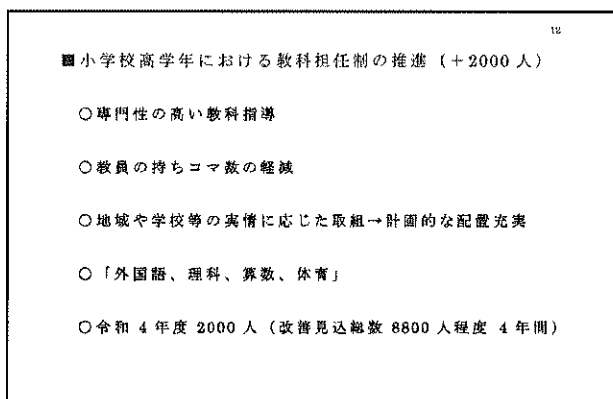
次は、新型コロナウイルス感染症の影響についてです。報道されているとおりですが、この結果を文科省はここを強調することによって、先生方の「学びの保障」「学びを止めない」ということでも、「オンラインによる学習をぜひ進めてくださいね。」というあたりの意図も感じ取れると思っています。

令和4年度の文科省の概算要求についてです。教科担任制の推進に+2,000人、35人学級の推進に+3,290人、教育課程への対応のための基礎定数化に+370人、スクールサポートスタッフや学習指導員の配置も大幅増となっています。



この数値だけを見ると、非常に景気のいいありがたい状況に見えますが、実際は義務教育国庫負担金で配置されている教員に関しては、自然減が6,910人います。児童数の減少によって教員は7,000人近く自然減をしています。その中で初めて生まれてきた数値かもしれません。そうは言っても教科担任制の推進のために2,000人、予算請求した35人学級が実現したということは今までなかったことです。文部科学省の努力には敬意を表さなければいけないと思います。

次は、経年変化から気になった項目です。「将来の夢や目標をもっているか」という項目で、5ポイント以上減少しています。「学校に行くのが楽しいと思う」かは、6ポイント減少をしています



このことは、学校現場を預かる校長としてしっかりと受け止めて、どこに原因があって何を改善しなければいけないのかということを考え、教育課程の実施状況につなげていかなければいけないと思っています。やはり多くの子どもが学校行事を楽しみにしていたり特別活動で成長したりするため、それがこのあたりの一因にあるのかも知れません。この結果は重く受け止めて、教育活動につなげていきたいと思っています。

教科担任制はこのようになっています。文科省からは、「今の小学校高学年の週あたり25時間の持ちコマ数を20コマまでに下げるためにはどれだけの配置が必要かということでこの数字を算出した。」という説明を受けています。

改善の見込総数は4年間で8,800人程度、ここ(「外国語、理科、算数、体育」)が優先的に教科担任にする教科です。たぶん来年度から一定数の教員が配置され、ある一定の教科では教科担任を進めるということになるとは思いますが、

まだどうい制度設計になるかははっきり決まっています。この予算が通り、それぞれの都道府県の教育委員会に何人配置されるかがはっきりした中で、市町の教育委員会に降りて、学校に示されるという形になるのかなと思っています。一足飛びに、どの学校でも高学年の教科担任制が来年度から進むかと言えばそうではないということです。そのあたりをご理解ください。

<p>13</p> <p>■ 小学校における35人学級の推進 (+3290人)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 令和4年度 第3学年を引き下げ +3290人 ○ 令和7年度までに35人学級を計画的に整備 <p>■ 教育課題対応のための基礎定数化 (+370人)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 発達障害など通級指導の充実 (+586人) ○ 外国人児童生徒に対する日本語指導の充実 (+101人)
--

35人学級についてはこのような形ですけれども、教室の不足が起きる学校が今後出てくるかと思しますので、令和7年度までに教育委員会としっかりと連携を図って、教室の増室などを計画的に進めるようにお願いいたします。教室不足によって、35人学級が実現できないというのは大変もったいないことですので、このあたりのことも校長会としての対応をよろしくお願いいたします。

<p>14</p> <p>■ スクールサポートスタッフの配置 (24300人 +14700人)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 業務内容 学習プリント等の準備や採点業務 来客・電話対応、消毒作業 等 ○ 想定人材 地域の人材(教員志望の学生等) ○ 資格要件 特別な資格等は必要なし ○ 実施主体 都道府県・指定都市 ○ 負担割合 国1/3 都道府県・指定都市2/3

スクールサポートスタッフも大幅増です。ぜひご活用ください。ただ、負担の割合は国が3分の1、都道府県指定都市が3分の2なので、都道府県がしっかりと予算を付けてがんばってくれないと、学校までなかなか降りてこないという状況になりますので、道小の校長先生方で、ぜひ北海道に強く働きかけをお願いします。

<p>15</p> <p>■ 学習指導員等の配置 (14100人 +3100人)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 想定人材 退職教員、教師志望の学生、学習塾講師 NPO等教育関係者、地域人材 等 ○ 資格要件 教員免許状は必須ではない (教育課程内の授業を単独で行う場合は必要) ○ 実施主体 都道府県・指定都市 ○ 負担割合 国1/3 都道府県・指定都市2/3
--

次は、学習指導員です。

この学習指導員は、学習サポート、例えばTTや習熟度別放課後学習、外国人児童への対応などにも使えますし、不登校児童への支援、いじめの対応にも活用が可能です。

また、校長経験者による若手教員への授業の指導などにも活用できるというつくりになっていますので、ぜひご活用いただきたいと思います。先ほどのスクールサポートスタッフと同様、負担割合は同じになっていますので、ここ(都道府県)ががんばってくれないと学校に降りてこないというのが現状です。校長会として一生懸命働きかけなければいけないと思います。

<p>8</p> <p>(3) ICTを活用した学習状況④</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 教員がICT機器の使い方を学ぶために必要な研修が実施されているほど、ICTの活用頻度が高い。 ○ ICT活用に必要な研修機会が「ある」「どちらかといえば、ある」と回答した学校は84.8%。 ○ ICT機器の活用について、技術的にサポートできる体制が整備されているほど、ICTの活用頻度が高い。 ○ サポート体制が「ある」「どちらかといえば、ある」は63.9%。

次は、教員免許更新制です。

教員免許更新制を発展的に解消するというのが、検証小委員会審議のまとめで出された結果です。ですので、このまま進めば教員免許更新制は廃止になるだろうと考えています。これは、全連小としても繰り返し主張してきたところです。このあたりの全連小の主張が、今回大幅に受け止めてもらったということは、学校現場の意見が通り、先生方への負担も少しずつ少なくなっていくだろうと考えられますし、この深刻な人材不足にも、少しはプラスになるのかなとは思っていますが、このことについては本当に大変な状況が、今、起きているのも事実です。

17

4 学校における働き方改革

<文部科学省>

- 勤務に係る制度（給特法）改正

- ① 公立学校の教師の勤務時間の上限に関するガイドラインの「指針」への格上げ
- ② 休日の「まとめ取り」のため、「1年単位の要形労働時間制」を地方公共団体の判断により条例で選択的に活用可能に

20

終わりに 「新型コロナウイルス感染症状況下の教育活動」

- 児童と教職員の健康・安全を最優先に
- 学校は、全ての子どもたちが安心して通える魅力的な場所
- 周囲を巻き込み、志高く、挑戦し続ける校長でありたい
- 全国には、18800余の校長仲間がいる
- 心を一つに、難局を乗り越えよう 制約を力に変えて

学校における働き方改革については、今、それぞれの学校で進められていると思います。

終わりになりますけれども、この1年半ほど、とにかく私たち校長は、先が見通せない中、正解が何かかが分からない中で、判断することを常に求められてきました。校長先生方は気の休まる時間がほとんどなかったのではないかな、そのように思っています。

18

- 学校や教育委員会から国への要望を踏まえた各取組の推進

- ① 教職員定数の改修
- ② 教科担任制の推進
- ③ 支援スタッフの配置支援
- ④ 部活動の見直し
- ⑤ 教員免許更新制の検証
- ⑥ ICT環境整備の支援
- ⑦ 学校向け調査の削減
- ⑧ 全国学力・学習状況調査のCBT化

- 自治体や学校における改革サイクルの確立

そういう中であっても、やはり学校は全ての子どもたちが安心して通える魅力的な場所でありたいと思いますし、私も校長は、どんな状況でも周囲を巻き込んで、志高く挑戦をし続けていきたい、そのように思っています。

文部科学省からは、このように計画的に取り組んでいるところだと聞いています。ただ、8番の全国学力学習状況調査のCBT化（パソコンを使ったオンラインでの調査）がなかなか実現までに時間がかかるかなという気もしています。学校の通信環境も整わないですし、子どもの状況もここまでなかなか結びつかないかなと思っており、このことが学校の働き方改革につながるかなというの、なかなかむずかしいところかなと思っております。

北海道の先生方、厳しい状況ではありますけれども、全国には1万8,800人を超える小学校の校長仲間がおります。校長たちがしっかりと心をつないで、気持ちを一つにしていけば、この難局はきっと乗り越えられると思います。

19

<教育委員会>

- 勤務時間の客観的な把握の徹底
- 各取組の推進
- スラップ&ビルドを原則とした施策推進
- 学校運営協議会制度の導入や地域学校協働本部の整備を促進

<学校>

- 業務の見直し・削減
- 地域・保護者との連携

私たちは、今、様々な制約のもとにあります。制約を大きな力に変えて、新しい学校の価値、これからの学校づくりに前向きに取り組んでいきたい、そのように考えています。

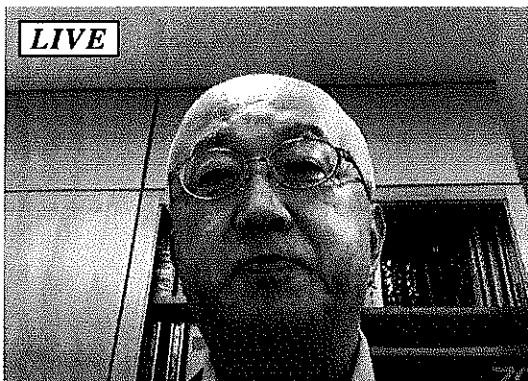
本日は、このような貴重な研究会の場で話をする機会をいただきまして、心から感謝を申し上げます。これからも、全国連合小学校長会の活動に、どうぞお力をお貸しください。

本日は、研究大会、本当におめでとうございます。ありがとうございました。

このあたり（上方●の4項目）は、教育委員会をお願いをしたい取組となっています。改めてご確認ください。



LIVE



第64回北海道小学校長会教育研究石狩・千歳大会

大会主題・研究課題 趣旨説明

北海道小学校長会研修部長
南部 和 紀

北海道小学校長会研修部長の南部でございます。

大会主題・研究課題 趣旨について説明申し上げます。

全国連合小学校長会は、真摯に研究と実践を積み重ね、我が国の小学校教育の充実・発展と教育諸条件の整備に多くの成果を収めてきました。その成果を踏まえ、令和2年度から研究主題を「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」とし、取組を進めているところであります。

この研究主題の実現と追究を目指すため、第64回北海道小学校長会教育研究石狩・千歳大会は、これまでの研究の成果と課題を踏まえ、副主題を「ふるさとに誇りと愛着をもち ともに未来社会の創造に挑戦する子どもを育てる学校経営の推進」と設定し、学校経営の責任者である校長の果たすべき役割と指導性を究明しようとするものであります。

北の大地「北海道」は、その厳しい寒さゆえに、開拓時代、多くの人々に困難をもたらしました。しかし、今では、冷涼な気候を利用して安全・安心な食材を豊富に産出する日本最大の食糧基地となり、雪を活用した観光やスポーツが大きな魅力となっています。先人たちの知恵と工夫と挑戦が、この厳しい自然環境を克服し、現代に恩恵をもたらしているのです。

本大会の副主題には、豊かではあるが厳しい自然を乗り越え、人との絆を大切にしながら、脈々と人の営みを紡いできた先人たちから、地域に根ざした文化や歴史などを学び、さらにそこから、自ら未来を切り拓き、自分の夢や目標の実現を目指す人材を育みたいという思いが込められています。

これからの社会は、自立した個人が個性・能力を生かし、相手の価値を尊重し、多様な人々との協働を通じ新たな価値を創造していくことができる柔軟な社会の実現が求められます。

こうした新しい社会の形成に向けてたくましく挑戦する子どもを育てるためには、人と人との絆を強め、支え合う共生の意識や夢と希望に満ちた活気溢れるふるさとづくりに積極的に貢献しようとする意識など、社会の創り手としての意識を醸成することが必要です。

また、環境・資源・エネルギー問題などに関するグローバルな視点を持ち、多様な人々と協働して、地域の環境・経済・少子高齢化・地域格差などの身近な課題についての解決策を考えようとする資質が求められます。

さらに、一人一人の個性と人と人との絆を大切にしながら、自然災害やコロナ禍などからの復興・再生に粘り強く取り組むことができるたくましさや育むことが大切となってきます。

こうした教育課題の解決や社会状況を改善していくには、子ども一人一人の能力を伸ばし、来るべき社会の担い手として必要とされる基本的な資質・能力を育む学校経営を推進していくことが必要となるのです。

本大会の全体会及び分科会が、皆様方の学校経営の一助になれば幸いです。

本大会は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、全体会はオンライン配信、そして、分科会は動画配信及び誌上交流といった、初めての試みによる開催です。例年とは大きく異なる開催方法ではありますが、校長会各会員の叡智と鋭気が結集する大会として、更なる研究の深化・発展に向け、北海道小学校教育の充実、発展に資することを目指していきたいと思っております。

本大会が、皆様一人一人のお力で充実したものとなることをお願い申し上げまして、大会主題・研究課題 趣旨の説明といたします。

どうぞよろしく願いいたします。